3902

南関東中世銭貨の成分分析

The component analysis of the medieval coin in southern Kantou area

EE54　山岸　直幸
指導教員　山舘　順

1. 緒　言

本研究は平成 21 年度卒、櫻井俊輔　園龍之介の研究である「中世出土銭の成分分析」を引き継いだものである。

本研究の狙いは東京都日野市出土の中世銭貨と東京都多摩市内出土のものとの比較により、当時の銭貨の流通経路を考究する上での手掛かりを見出そうとするものである。また、史料がほとんどない日野市中世の歴史を銭貨の成分分析を通して、明らかにしようという試みである。

2. 研究のアプローチ

今回は実際に出土した 15～16 世紀の古銭の分析を行った。東京都日野市四ツ谷前遺跡出土の銭貨と多摩ニュータウン出土の銭貨である。その 21 枚の銭貨を蛍光エックス線解析装置で分析した。21 枚のうち 7 枚は破壊検査することができたため、うち 7 枚は破壊検査のときの分析結果と非破壊検査の分析結果とを比較検討した。

3. 結　果

21 枚の分析を実施し、各銭貨の成分のデータが得られた(スペースの関係で省略)。

そして、破壊検査と非破壊検査の成分データの比較を行った。

表 1　昨年度の研究で分析した銭貨の平均値　　(mass%)

Si	Fe	Cu	Sn	Pb
8.48	1.26	57.1	11.6	21.4

表 2　本研究の資料番号 1010 のデータ　　(mass%)

Fe	Cu	Ag	Sn	Pb
3.15	58.9	1.41	13.7	22.9

表. 3　本研究の資料番号 1110 のデータ　　(mass%)

Fe	Cu	Ag	Sn	Pb
0.797	72.6	0.679	7.16	18.8

表. 4　本研究の資料番号 1124 のデータ　　(mass%)

Fe	Cu	Ag	Sn	Pb
0.566	72.5		7.6	19.3

4. 結　論

同じ銭貨でも非破壊検査と破壊検査の場合、同じ測定方法を用いても成分のデータに違いがあることが分かった。表 1（東京都多摩センター出土）のデータは非破壊検査、表 2（東京都多摩センター出土）のデータ表 3（東京都日野市出土）のデータが破壊検査である。

この事から、非破壊検査で似通った成分の銭貨を発見できたとしても同じ鋳造元もしくは鋳造時期とはいえないという結論に至った。

表 2 と表 3 を比較すると、似通った成分であることがわかる。そのため、この二つの銭貨は同じ鋳造元だと思われる。この事から、中世の日野市と多摩ニュータウンは銭貨を通じての交易関係があったと推測される。

さらに、今後分析の試料を増やしていくことで本実験の継続の重要性を見出だすことができた。

今後は多摩市の東京都埋蔵文化財センターや日野市郷土資料館、本校近辺の博物館などとコンタクトを取り、とりわけ多摩川中流域の出土銭貨との成分分析の比較検討をすすめていく必要があると考えられる。

5. 今後の発展

今回の研究で日野市と多摩ニュータウンという隣接地域から、ほぼ同じ成分構成である銭貨を見つけることが出来た。今後は日野市や多摩ニュータウンだけでなく、多摩中流域の他の出土銭貨を分析していき、同じ鋳造元の銭貨を発見していくことで、中世後期の社会経済、ひいては関東地方南部の銭貨の流通実態を解明していけるのではないかと思われる。

文　献

[1]櫻木晋一, “貨幣考古学序説,”PP.19~32,月年(Jan.2009)
[2]八坂神社, “八坂神社と日野,”PP.30~32,月年(Jan.2010)